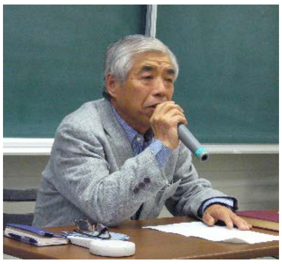
郷土史 ていね
第 103 号
平成 28 年 7 月 13日
手稲郷土史研究会会報

平成28年6月8日定例会会員発表要旨

手稲山の自然あれこれ

手稲本町　濱谷　義昭会員



標高 1.023 ㍍の手稲山は札幌市民のシンボルであり自然の宝庫です。豊かな緑、四季折々の景色は素晴らしいドラマをみるようで心が引き付けられます。「地元手稲区民の山」「憩いの山」「花咲く山」は、初登頂が明治 45 年頃、北大スキー部の 8 人が琴似駅から馬橇（ばそり）で琴似発寒川右股上流へ、そこからスキーで登頂したとの記録があるといいます。　大正 15 年に竣工された「パラダイスヒュッテ」（日本初のスイス式丸太造り）は北海道大学が管理する山小屋で、平成 7 年に頂上直下のＶ字沢付近に「北大創立 50 周年記念事業」として再建されており、今も多くの人に親しまれています。

手稲山は私有地であるが故に、頂上にテレビ塔が林立しており、山の自然が失われるのではと気になっていのは私だけでしょうか。 近年は山菜採りに入山する人も増え、「アズキナ」や「ウド」を見間違える人がいたり、タケノコ採りで山に入った人が脱出できなくなり、パトカー・消防車・救急車・ヘリコプターを出動させての一大捜索が行われて救出された例や、雪渓に身体を落とし脱出できなくなった女性を助け上げたこともありました。山菜採りの人の後を追走しているうちに帰れなくなった二人組の女性もいました。

最近は新幹線に関連した工事関係者の姿も見かけるようになったためか「熊」、「狐」、「狸」「鹿」さらに足元の「カエル」や「サンショウウオ」とか「ザリガニ」など小動物も少なくなっているようです。手稲山に限らず近隣の山々は、春の花は背丈が低く、夏の花は膝上くらいの花が咲き、秋の花は人の背丈くらいの高さの花が咲きます。夏は新緑から陽光があふれ、秋は燃えるような紅葉、冬山は白銀の世界へと自然を十分堪能させてくれます。

手稲山は市民のシンボル的な山で JR 手稲駅から眺めても、石狩平野から眺めても、垂れ込めた雲間から見上げても、その姿は神秘的で♪手稲山雲湧くところ、軽川のながれも…♪と手稲中央小学校の前進・軽川小学校の校歌に謳われているように「ふるさとの山」「自然豊かな山」をこれからも見守っていきたいとお話されておりました。

次回の予定
8 月 10 日(水)18：15
「関　寛斎」と樽川
　濱埜会員の発表
仙台藩白石城主
　片倉小十郎元家臣団
　平佐会員の発表
区民センター３F

参考資料「やまなみ手稲」の会　（文責:佐々木）

文明開化、テイネを駆ける

前田在住　沖田　紘昭会員

軽石軌道についての講演であるが私にとっては３回目なので、少し趣向を凝らしてみた。馬鉄が文明開化の象徴の一つであることは誰にも明らかである。されば軽川にその他の文明開化はなかったのか。その疑問のきっかけは軽石軌道で永く専務取締役の任にあった宮城和一氏であった。手稲の歴史年表によれば、明治２３年の頃に「山口農談会で氏が、“農家の経済”について演説した」とあり、その要約内容は道立文書館にて旧北海道毎日新聞のマイクロフィルムに読むことが出来た、開拓農家５人家族の年間経費をベースに、作付けから農業経営について細かに例をあげながら論じているのである。これは現在でも通用するほどの内容であり、正に小作農の文明開化といえるのではないか。何よりも、江戸時代末期に既にそういう知識があったということに驚かされるのであるが、同時に馬鉄事業に参画した一人ひとりを知ることこそがこの大きな課題の解明につながるのではないかと直感したのである。

今回の極め付きは、北海道大学図書館で宮部金吾先生の特別閲覧図書の中に田中壌の大日本植物帯調査附図があった事と、同図書館司書が見出してくけた、「田中壌の生涯と事跡」(１９６９年に北方林業誌に発表、札幌営林局経営部の長池敏弘著)、並びに「北海道造林合資会社の顛末」(同氏著)を読むことが出来たことである。自分は北海道造林が近藤新太郎の作った会社とばかり思っていたので、田中壌がその人であることを知らされて頭をガンとたたかれた思いがした。そしてこの田中壌こそ正に文明開化の先導者の一人だった。田中はその生涯を日本国の営林事業に捧げたといってもよく、結核のため若干４６歳での死は殉職と言っても過言ではないだろう。

死後近藤新太郎は、田中の教えに従い見事に手稲の地に植えられた造林、育林、営林の大輪を咲かせ、数々の受賞を賜り、この会社を日本全国のモデル事業にまで育て上げた。後世語られているように、田中、近藤、宮城この三人にはそろって私というものが無い。公のために全身全霊を尽くしたのである。軽石軌道に社長を置かなかったのは近藤の決断である。大株主である近藤は社長になろうと思えばなれる立場にあった。しかし飾りの社長に高額の報酬を支払うことを許せなかったのである。ホルスタインを育て日本一の種牛を出荷し酪農経営の先端を走った一人が竹内静勝である。しかしここで彼の業績を語るには調査が不足している。

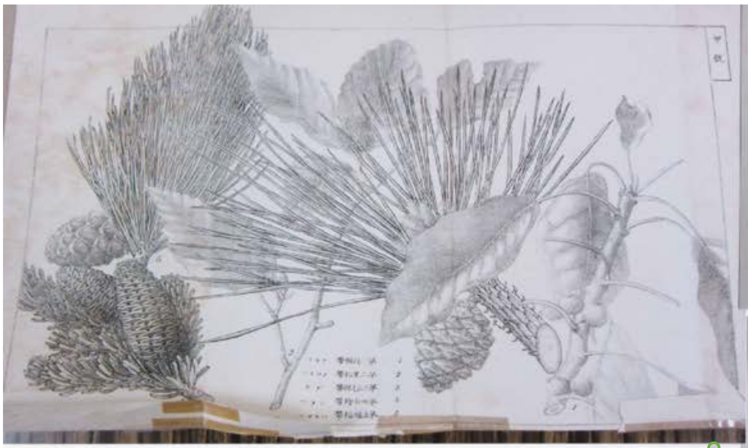
最後に軽石軌道はその名のとおり手稲と石狩をつなぐ架け橋である。近くて遠い隣町。お互いに札幌中心部の方ばかり見ていて横を向く閑がない。されば先人の思いを受けた今こそ、隣人同士の交流が深まり行くことを切望したい。同じ手稲山を望む町民同士として。

【写真説明】

６年間に亘る本州各地の踏破による「大日本植物帯調査報告」(明治 18 年、内務省山林局に提出された)に添付された田中壌直筆の各種図表(銀座のお雇い外国人が教えた印刷所にて、銅版エッチングによる活版印刷)

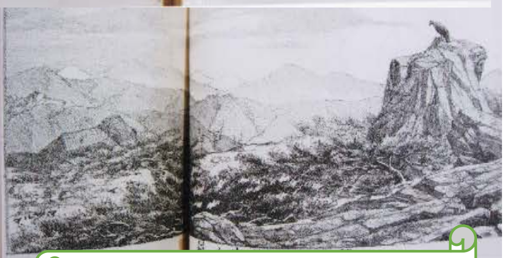
田中は調査区域の各植物帯それぞれの定在樹種を検討し、これを類聚比較して樹類天然

育成の地位、すなわち「帯位」を定めた。後に北海道造林合資会社の経営戦略の骨格として活かされた。



第一よう樹帯　(暖地に生えるくわ科の常緑高木)

植物帯位置及び潮流略図　(原図はカラー)



写真上:第二黒松帯中の景
写真中:第四白檜帯中の景
写真下:第五這松帯中の景

文芸サークル報告

6 月 22 日、石狩市釣本会員宅にて文芸サークル例会を開催、濱埜会員発表の「関寛斎と樽川」、小田前会員の「札幌中央寺と座禅体験」のビデオ研修、その後、話題となった逸話を聞きながら関農場（跡地）の最近の様子と、樽川神社・樽川運河を現地視察することができました。

樽川神社の歴史　　　　石狩市在住　釣本　峰雄会員

父が稲作農家をしていた樽川の土地には数百坪ほどの林があり、両親はそれを神様風防林と呼んでいました。その理由を聞くと、昔ここで今井という人が草刈りをしているときに、誤って白蛇の首を切ってしまい目が見えなくなったので、白蛇の祟りを鎮めるために祠を建てた、それが樽川神社になったそうです。

樽川神社はその後、樽川墓地のそばに移転しましたが、新港が出来るときに現在の農住団地に移されました。樽川小中学校もその時開校になり、校庭にあった二宮金次郎の石造を父がトラックで運ぶときに誤って足を折ってしまいましたので、それ以来金次郎像は上半身だけになってしまいました。樽川神社には金次郎像のほかにネットで一番不細工と評

された親子の狛犬もいます。

会員の広場

相川、三国さんに表彰状伝達

手稲区防犯協会が学童の見守り活動に功績と

稲穂在住　一ノ宮　博昭会員

本会会員、相川重吉、三国勲さん(ともに稲穂在住)は、７月４日、手稲警察署で開かれた手稲区防犯協会総会の席上、長年にわたり小学生の登校見守り活動に功績があったとして、佐々木針防犯協会長、石川昭弘手稲署長連名の感謝状を受けました。

２人は、ほぼ毎朝、稲穂小に登校する小学生とともに、本会会員の一ノ宮と３人で３方から学校近くの交差点で合流、朝のあいさつはもちろん、「左右をよく見るんだよ」などと注意したり、校歌を歌うなどして交流を続けてきました。

３人は、防犯協会から支給された「みんなで創ろう安全の街」と染め抜いたグリーンのジャンバーと帽子を着用しているため、こどもたちから「キャベツ君」とあだなされています。「おはよう」だけでは芸がないので、大きな声とともにハイタッチするのが恒例です。両手にはトマト、ニンジン、アスパラ、桜、なすび、たけのこなどをあしらった、一双１００円の軍手を着用しています。一番人気はなんといってもおにぎりです。「腹へったぁ」と書かれているからです。

送迎バスに乗る保育園児、幼稚園児も含まれています。もう５年になりました。ときには付き添いのパパやママとハイタッチすることもあります。また、巡視するパトカーと行き交うこともあります。必ず手を振るよう促します。すると、ほとんどのおまわりさんが答礼してくれます。

２人は「特別のことをしているわけでもないのに」と恐縮しながら「こんどは下校にもつきあわなくちゃ」と語っています。

なお、一ノ宮は稲穂連合町内会長当時、同協会役員を兼ねていたため、平成２５年、道防犯協会連合会理事長、道警本部長表彰を受けているため除外されています。

感謝状を受け取る相川重吉さん

感謝状を受け取る三国勲さん

写真提供手稲警察署